

3日目 オフィチエンシム アウシュビッツ第2収容所 ビルケナウ-3

自分のペースでアウシュビッツを感じる

ビルケナウを見学した時点で、通常の見学コースは終了となります。
しかし、このツアーは、2日目の午後に予備として自由時間にしていました。

スモーレンさんの体調の塩梅で、1日目にお話が聞けないかもしれない、という危惧があったためでした。

*しかし、あとで中谷さんから年齢を聞いてびっくりしたぐらい、とてもお元気でそんな心配は無用、3時間も私たちにお話をしてくれました。

1日目にお話が伺えたので、2日目の午後が空きました。
前日中谷さんに、どのように過ごしたらいいかと相談したところ、
自分なりのペースで回るのがいいのでは、というアドバイスをいただきました。

確かにツアーでは、じっくりみたい人と、他のものがみたい人も一緒に回らなくてはいけません。自分の歩幅で、感じるままにもう一度こう光景を見返すのが一番の消化剤なのかも。

というわけで、伝統的なポーランド料理（シラク元大統領も訪れたことがあるとのこと）の食事のあとに、



saita(c)

いまは建物だけが残る第3収容所のモロビッツをバスから見学。



saita(c)

そのあと、第1収容所、第2収容所の順にバスを停車。各自が回りたいところで降りて自由に回る、ということに。

その時点で雨が降っていましたが、第2収容所を希望した若者が2名。

残りは第1収容所へ。

私は古ねこ・立花先生にくっついて、ガイドのモニカさんと移動することに。

「第1にもどる、あれがみたい、あの白いやつ」

ビルケナウの展示に不満だった立花先生がまっさきに向かったのは、ガス室の白い模型でした。

ガス室内部で、換気口のある天井をめがけて山のように人が折り重なった様、焼却炉に亡骸が運ばれる様子などが、かなりリアルに再現されています。



それをみながら、先生はまたもやガイドのモニカさんを質問攻めに。

第2収容所のガス室の跡をみて、「あの展示の仕方では構造がわからない！」とぶつぶついていた理由がようやくみえてきました。

先生は、第2収容所の風景と、模型のつくりとガイドさんの説明、それまで自分が読んできた本の内容を重ねあわせて、これまで見てきたことを脳のなかで組み立てていたのです。それも、自分の納得のいくまで徹底的に。けれども、第2収容所の簡単な立て看板では、それができなかったのです。

その質問攻めにしている光景をみていると、先生がこれまで話してきた本の内容や、それまで見てきた展示やアウシュビッツの風景が、カシャカシャと組み立てられて、どんどんアウシュビッツや当時ヨーロッパで起きたことが立体的に感じられてきます。

どうやら、一番「消化不良」を起こしていたのは先生だったようです。

そして、その「消化不良」の解消しようともがいている先生の姿から、私は立花隆のすごさを間近にしていました。

徹底的に真実を追及する姿勢、
納得いくまで突き詰める探求心
そしてこれこそが、
当時の総理大臣を辞任に追い込んだ、立花隆の根源なのだと。

先生は、ガス室の構造を頭の中にくみたてながら、

「なぜ、ドイツ人はあそこまで執拗にユダヤ人を追い詰めたのか」

というこのツアー全体で、あちこちで問いている疑問のヒントを得ようとしているようにもみえました。

■けれども、ちょっと先生に反論

ちなみに、私の個人的な意見では、ビルケナウは広大なお墓なのだと思います。中谷さんのお話を聞いて、ますますそれを確信しました。

ここは、亡くなった多くの人たちのことを感じる場所。

だから、詳しい説明は第1収容所に任せて、お墓は、そこで何があったのか立て札だけで十分だと思うのです。

だから、ビルケナウの展示の仕方が悪い、というわけではないと思います。

さらにいえば、

- ・ビルケナウは理屈抜きで感情に訴える場所、
- ・第1収容所跡は事実やドキュメントで訴える場所、

だと思っています。

そして、どちらでより大きな衝撃を受けるかは、
個々人で違うのではないかと考えています。